特別史跡加曽利貝塚
新博物館基本計画
（素案）

目次

Ⅰ　施設の基本方針

1　背景と本計画の位置づけ …… 1
2　新博物館の役割と位置づけ …… 4
3　新博物館の基本方針 …… 6

Ⅱ　事業活動計画

1　事業活動の全体像 …… 13
2　事業活動のテーマ …… 14
3　事業活動の展開 …… 15
4　史跡及び関連施設との機能の分担・集約 …… 22

Ⅲ　施設計画

1　施設整備の基本的な考え方 …… 23
2　施設計画検討に係る条件設定、
　候補地の条件整理 …… 24
3　諸室の構成 …… 28

Ⅳ　展示・体験計画

1　展示・体験の展開方針 …… 33
2　テーマ構成 …… 34
3　解説計画 …… 46

Ⅴ　管理運営計画

1　管理運営に係る基本的な考え方 …… 47
2　管理運営方式 …… 48
3　組織体制 …… 49
4　「みんなでつくる・育てる博物館」に
　向けた考え方 …… 50
5　開館形態 …… 52

Ⅰ　施設の基本方針

１　背景と本計画の位置づけ

（１）加曽利貝塚の概要と現状

加曽利貝塚は、縄文時代中期（約５，０００～４，０００年前）の直径１４０ｍの環状の北貝塚と、縄文時代後期（約４，０００～３，０００年前）の直径１９０ｍの馬蹄形の南貝塚が連結し、８字形の特異な形状をする国内最大級の集落遺跡です。貝塚とその周辺に分布する集落が一体的に遺された稀有な例としても知られ、史跡周辺に保存された緑地や東側を流れる坂月川が、縄文時代を思わせる景観をつくり出しています。

加曽利貝塚では、明治時代から１００年以上の調査・研究の歴史があり、約１４０軒の竪穴住居跡や２００体以上の人骨、長径１９ｍに及ぶ大型建物跡などが貝層の内外から見つかっています。実際に発掘調査が行われた面積は全体の８％未満、貝層部に限ると３％未満に過ぎず、今なお多くの可能性を秘めた遺跡と言えます。

平成２９年１０月、縄文時代中期から晩期までの約２，０００年にわたる生活の跡が今も良好な状態で保存されていること、貝層断面などの野外展示が埋蔵文化財の整備・活用に関して先駆的な存在であることなどの様々な観点から、我が国の文化の象徴であるとして、加曽利貝塚は、国の特別史跡に指定されました。

現在、加曽利貝塚縄文遺跡公園として約１５．１ｈａが保存・公開され、北貝塚・南貝塚の貝層断面観覧施設、北貝塚の住居跡群観覧施設、復元集落などが整備された遺跡内を自由に散策することができます。

（２）加曽利貝塚博物館の現状と課題

昭和４１年１１月に開館した加曽利貝塚博物館（以下「現博物館」という。）では、発掘調査、分析・研究、史跡の管理及び出土資料の展示などの活動を今日まで行ってきました。展示室では、発掘調査で出土した縄文土器、土偶及び石器などの出土遺物を中心に展示しているほか、東京湾周辺に住んでいた縄文時代の人々の生活の様子を解説し、縄文時代の貝塚の特徴や貝塚研究の歴史など、加曽利貝塚が日本の考古学に与えた影響について紹介しています。近年では、市民向けの講座、教室及び体験プログラムなどの様々な体験学習の機会を積極的に提供しています。

しかし、現博物館は、特別史跡指定地内に位置しているため、加曽利貝塚の価値の一つである縄文時代の景観を阻害している側面があります。また、開館から半世紀以上を経て施設の老朽化や資料の収蔵スペース不足が生じていることに加え、出土資料の実物展示とパネルによる解説を主とするこれまでの展示は、来館者を惹きつける魅力や体験性並びに最新の研究成果を反映する可変性などについては十分とは言えません。

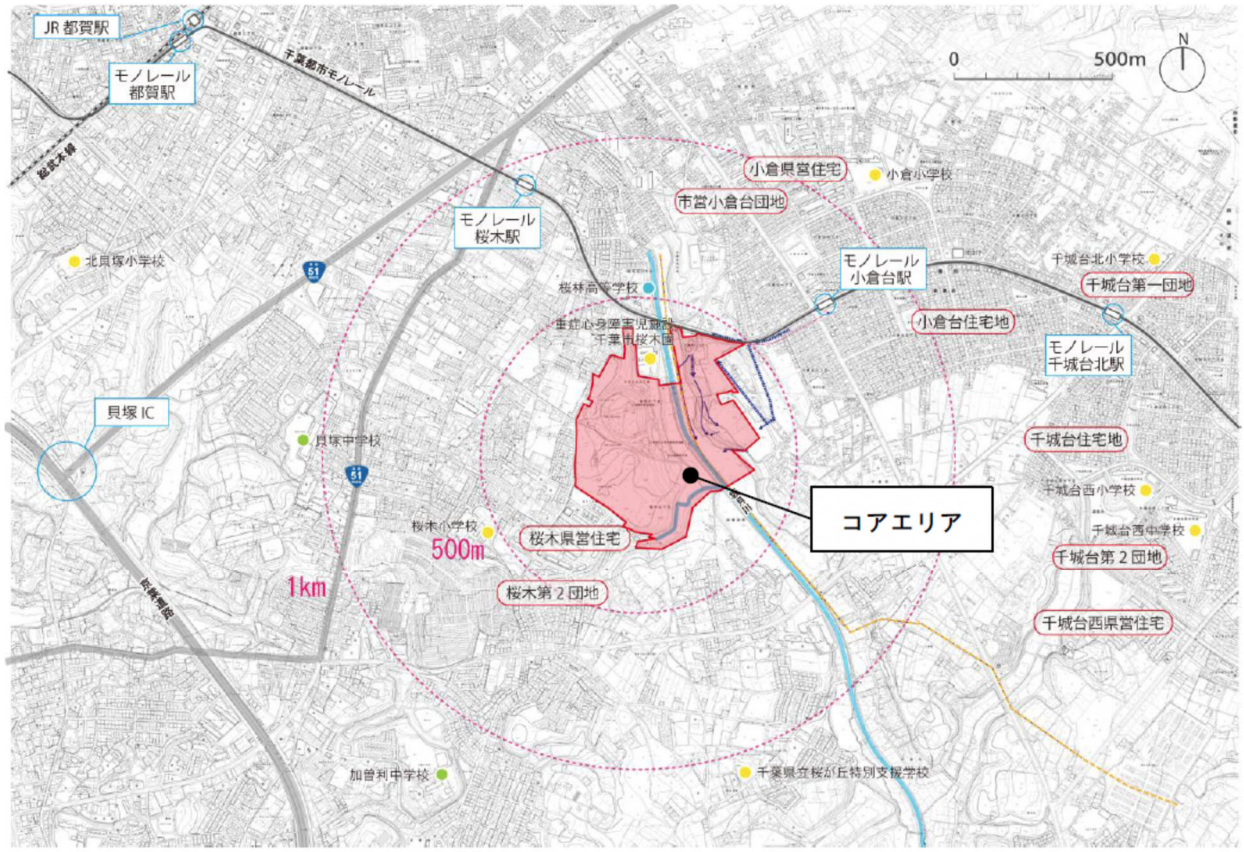
現博物館の来館者数は、昭和５７年度の年間７３，２２５人をピークに減少傾向になっていましたが、平成２７年の入館料の無料化、平成２９年の特別史跡の指定などに伴い、平成３０年度には７７，２２２人と３６年ぶりに過去最高を更新しました。

（３）本計画の位置づけ

本計画は、平成２９年１月に策定された「史跡加曽利貝塚保存活用計画」（以下「保存活用計画」という。）及び平成３１年２月に策定された「特別史跡加曽利貝塚グランドデザイン」（以下「グランドデザイン」という。）に基づき、加曽利貝塚の価値を広く発信し、後世へと継承するためのガイダンス機能を備えた「特別史跡加曽利貝塚新博物館」（以下「新博物館」という。）についての整備方針を策定するものです。

●コアエリア：特別史跡加曽利貝塚（約１５．１ｈａ）及び縄文の森特別緑地保全地区（約１６．５ｈａ）

●周辺エリア：コアエリアの周辺地域（概ね下図全体）



（「グランドデザイン」p5）

■加曽利貝塚の目指す将来像（「保存活用計画」「グランドデザイン」より）

史跡加曽利貝塚の目指すべき姿

（「保存活用計画」p1）

○縄文文化と貝塚の性格を究明し、調査研究の成果を世界に発信していく拠点
○研究成果に基づき、縄文時代の景観と人々の暮らしが体感できる史跡
○多くの人が集い、地域交流の中核を担う拠点
○人々の長い歴史を学び、自然と調和・共存する持続可能な未来を探る史跡

特別史跡加曽利貝塚の目指すべき将来像

（「グランドデザイン」p11）

1　特別史跡としての役割

・我が国文化の象徴たる遺跡としての価値を守り育て、新たな価値を生み出す史跡
・研究成果に基づき、縄文時代の景観と人々の暮らしが体感できる史跡
・貝塚の調査研究、整備方法を後世に伝えていく史跡
・人々の長い歴史を学び、自然と調和・共存する持続可能な未来を探る史跡

2　緑地、公園としての役割

・史跡と一体となった縄文時代の景観を演出する場所
・自然環境の保全と育成を通して自然に親しみ、くつろぎの空間を演出する場所
・学習や遊びなど多様な活動を行う場所

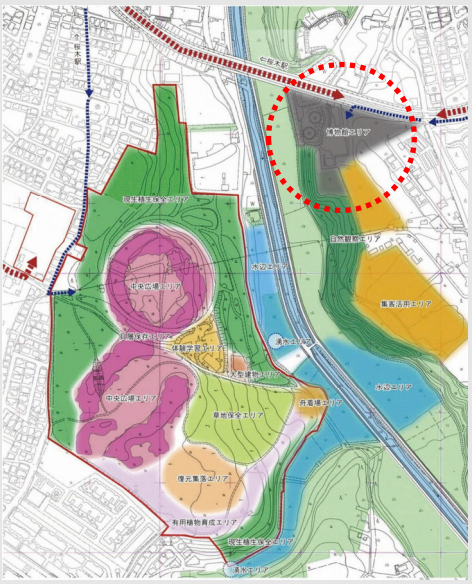
3　博物館としての役割

・幅広い調査研究を推進し、縄文文化と貝塚の性格を究明していく拠点
・縄文文化と貝塚に関する資料を収集保存し、後世へ守り伝えていく拠点
・調査研究の成果を積極的に公開活用し、世界に発信していく拠点
・学校教育や生涯学習など多様な学習を支援し、加曽利貝塚に携わる人材を育てていく拠点

コアエリアのコンセプト

（「グランドデザイン」p22～35）

本物を感じる体験型学習観光施設
～日本最大級の貝塚で唯一無二の縄文体験～



遺構保存ゾーン	ほんものの縄文にふれる史跡
公開活用ゾーン	縄文の生活を体験するムラ
自然保護ゾーン	暮らしを支える森（保護優先）
縄文植生ゾーン	暮らしを支える森（縄文植生再現）
新博物館ゾーン	縄文文化や貝塚の研究と、その成果を発信する拠点
水辺公園ゾーン	楽しみ、集う公園（水辺の活用）
縄文の森ゾーン	楽しみ、集う公園（緑地の活用）

2　新博物館の役割と位置づけ

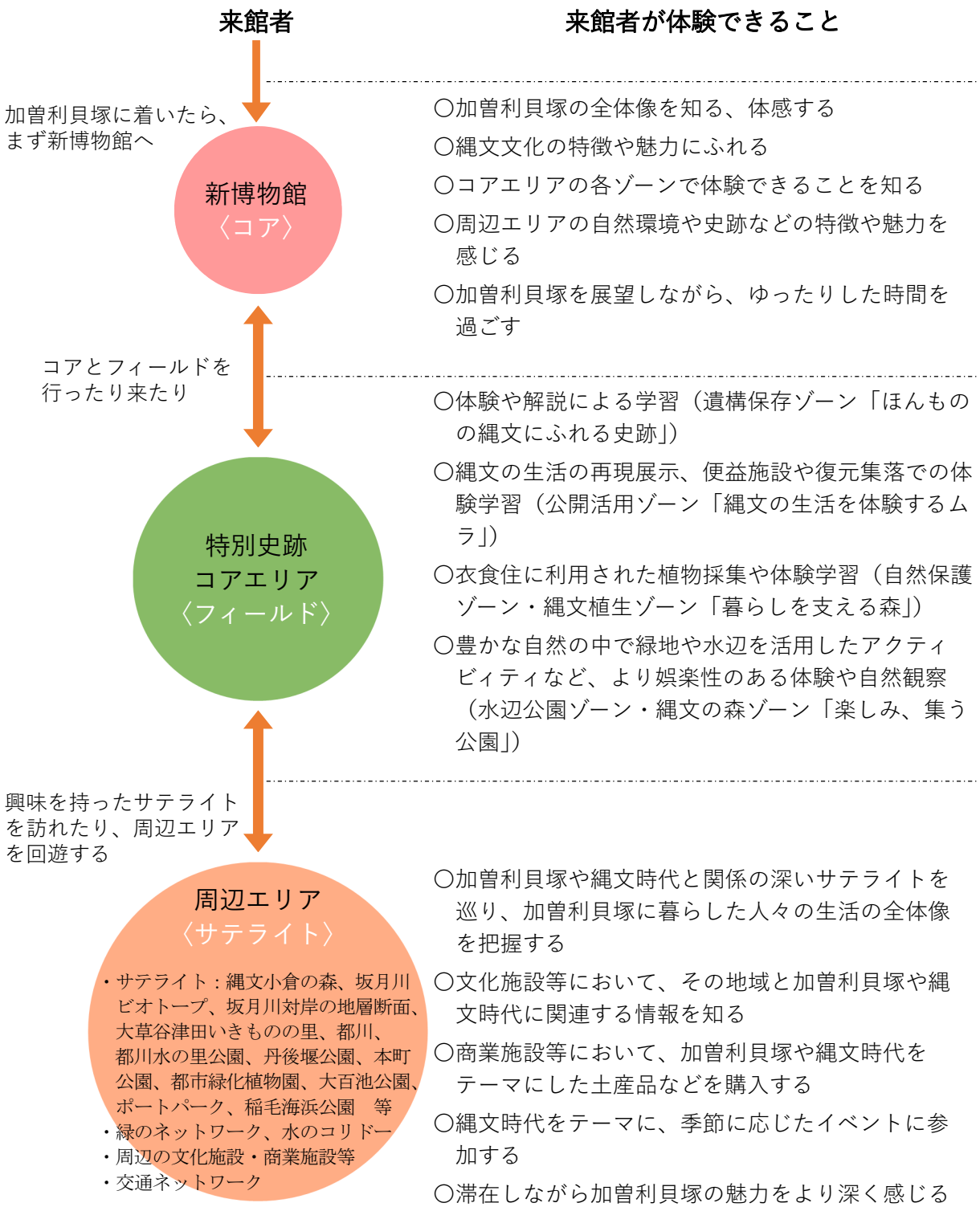
（1）新博物館に求められる役割

「グランドデザイン」に示した「特別史跡加曽利貝塚の目指すべき将来像」を実現するため、新博物館は次のような役割を果たすことが求められます。

特別史跡加曽利貝塚の目指すべき将来像			新博物館で担うべき役割
1 特別史跡としての役割	・我が国文化の象徴たる遺跡としての価値を守り育て、新たな価値を生み出す史跡	→	・特別史跡加曽利貝塚の新たな価値を生み出す調査・研究 ・出土資料の保存・継承
	・研究成果に基づき、縄文時代の景観と人々の暮らしが体感できる史跡	→	・研究成果に基づき、縄文時代の景観と人々の暮らしが体感できる展示・体験
	・貝塚の調査研究、整備方法を後世に伝えていく史跡	→	・貝塚の調査・研究、整備方法を後世に伝えていく展示・体験
	・人々の長い歴史を学び、自然と調和・共存する持続可能な未来を探る史跡	→	・人々の長い歴史を学び、自然と調和・共存する持続可能な未来を探る調査・研究、展示・体験
2 緑地、公園としての役割	・史跡と一体となった縄文時代の景観を演出する場所	→	・史跡と一体となった縄文時代の景観を一望できる展望スペース
	・自然環境の保全と育成を通して自然に親しみ、くつろぎの空間を演出する場所	→	・くつろぎの空間を演出するためのサービス機能
	・学習や遊びなど多様な活動を行う場所	→	・天候にかかわらず、学習や遊びなど多様な活動を行えるスペース
3 博物館としての役割	・幅広い調査研究を推進し、縄文文化と貝塚の性格を究明していく拠点	→	・縄文文化と貝塚の性格を究明していくための幅広い調査・研究
	・縄文文化と貝塚に関する資料を収集保存し、後世へ守り伝えていく拠点	→	・縄文文化と貝塚に関する資料の収集・保存・継承
	・調査研究の成果を積極的に公開活用し、世界に発信していく拠点	→	・調査・研究の成果の積極的な展示・発信
	・学校教育や生涯学習など多様な学習を支援し、加曽利貝塚に携わる人材を育てていく拠点	→	・学校教育・生涯学習など多様な学習への支援 ・加曽利貝塚に携わる人材育成

（２）新博物館と各エリアの位置づけ

「グランドデザイン」では、コアエリアだけでなく、周辺エリアのサテライトとのネットワーク化を目指しています。コアエリアの核である新博物館を中核として、周辺エリア全体に展開するネットワークを実現し、一体となって加曽利貝塚の価値や魅力を発信します。



３　新博物館の基本方針

（１）新博物館ゾーンのテーマ

グランドデザインにおいて設定された新博物館ゾーンのテーマは、次のとおりです。

その実現のため、新博物館にはグランドデザインに基づく様々な活動を担う拠点としての機能が求められます。

縄文文化や貝塚の研究と、その成果を発信する拠点

（２）新博物館の基本方針

新博物館ゾーンのテーマを実現するため、基本方針を次のとおり定めます。

縄文文化や貝塚研究の中核拠点としての活動

未発掘部分が９割以上を占める加曽利貝塚について、計画的な調査・研究を行い、その全容の究明を目指すとともに、縄文文化や貝塚を究明する中核拠点として、その成果を広く世界へ発信する活動を展開します。

自然と調和・共存する持続可能な未来の実現を目指す博物館活動

加曽利貝塚は、縄文文化や貝塚というテーマとともに、昭和の大開発時代に市民や研究者・学生の声によって保存された文化財という点からも、自然と調和・共存する持続可能な未来の実現に向けて重要なメッセージを有しています。

博物館における幅広い活動を通して、ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）※を推進し、加曽利貝塚やそこで暮らした人々の暮らしを通して、自然と調和・共存する持続可能な未来を探る調査・研究を蓄積するとともに、その成果を活かして未来を切り拓く人材を育成する活動を展開します。

※誰一人取り残さない持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため，
２０３０年を年限とする１７の国際目標

みんなでつくる・育てる博物館の実現

大学や博物館などの調査・研究機関や施設・公園内で実施するプログラムやイベントに関わる組織・団体などの関係機関と連携するとともに、市民とともに歩んできた加曽利貝塚の伝統を発展的に継承し、これまで以上に市民との協働を重視した活動を展開するため、計画段階から関係機関や市民の参画を促進し、開かれた博物館づくり、博物館運営を進めます。

加曽利貝塚への様々な興味・関心・幅広いニーズへの対応

国内外の研究者から市民や観光客まで、また、子どもや学生から大人・高齢者まで、幅広い人々の多様な興味・関心・ニーズを想定し、より多くの人がそれぞれの方法で加曽利貝塚に親しみ、その価値や魅力に触れることのできる活動を展開します。

体験の重視

加曽利貝塚に訪れる人が縄文時代の景観と人々の暮らしを体感できるよう、新博物館内をはじめコアエリア全体で、様々な体験ができる充実した体験プログラムを展開します。

（３）利用者層の再検討

「グランドデザイン」では、現博物館のこれまでの入館者推移や圏域人口などの分析を踏まえ、加曽利貝塚の主要なターゲットを、「小学校の団体」「小学生とその家族を対象としたファミリー」「シニア世代（６０歳以上)」と設定しています。

しかしながら、新博物館ゾーンのテーマを実現するためには、「調査・研究」をはじめ運営体制の拡充が欠かせません。加えて、市民や研究者など多様な立場の人々の参画を促し、幅広い活動の活性化を図ることも求められます。

こうしたことを鑑み、「グランドデザイン」で設定した主要ターゲット（「小学校の団体」「小学生とその家族を対象としたファミリー」「シニア世代（６０歳以上)」）を再検討し、新博物館の利用者層を次のように設定します。

利用者像	想定されるセグメント	求められる要素
市民	・子育てファミリー	家族で楽しめる遊び場
	・小中学生	遊び場・居場所、学習の場
	・高校生・大学生	居場所、活動・学習・研究の場
	・社会人	非日常的な学習・体験の場
	・シニア世代	学習の場、活躍の場、生きがい創出
研究者	・幅広い分野の研究者 ・大学生・留学生	発掘調査や共同研究への参画 自らの学習・研究のための利用
学校団体	・幼稚園	遊びながら史跡に親しむ
	・小学校、中学校、高等学校	地域の文化財を活用した学習の場、修学旅行
観光客	・国内観光客	首都圏において、自然の中で縄文時代を体感できる学習観光施設として利用
	・海外観光客	

（４）持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）に基づく新博物館の目標

２００１年に策定されたミレニアム開発目標（MDＧｓ）の後継として，２０１５年９月、国連サミットにおいて持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）が採択されました。２０３０年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標「持続可能な開発のための２０３０アジェンダ」として、１７のゴール・１６９のターゲットから構成され、地球上の誰一人取り残さないことを誓っています。ＳＤＧｓは先進国と発展途上国がともに取り組む普遍的なものであり、日本全体としても積極的な取組みが求められています。

縄文文化や加曽利貝塚についてＳＤＧｓの視点からとらえると、関連性の高い特徴として下記の２点が挙げられます。

①保存活用の歴史が持つ適合性

加曽利貝塚は、千葉県の環境の歴史上、最も大きな出来事である昭和の大開発という潮流のなかで、多くの市民や研究者・学生の願いを受け取り、国会の場で議論されて保存を決定した唯一の事例です。市民が守ってきた周辺環境とともに、昭和の大開発時代の文化財保存の象徴的な存在であり、こうした点が特別史跡指定においても評価されていることに誇りをもち、次世代に継承していくことが重要です。

世界的な規模で環境問題が議論され、ＳＤＧｓを開発指針の中心に置くこととなった今、過去の反省に立った今後の開発の指針－人や環境にとって特に大事な地域の資産を失うような開発は避けるべきであることーを強く訴える存在として、加曽利貝塚の価値を再度見直し、永久に残していくための事業を進めることの意義は大きいと言えます。

②縄文文化の適合性

縄文人は、海産資源に目を向け、今日まで繋がる世界有数の魚食文化の礎を築くとともに、豊かな自然を背景に数多の食材を見つけ、獲得・加工・保存の技術を研き、計画的に利用できる食材を組み合わせて列島各地に豊かな文化を生み出しました。なかでも貝塚は、縄文時代の食文化を現代・未来に伝える一番の証拠として、日本が世界に誇るべき遺産です。

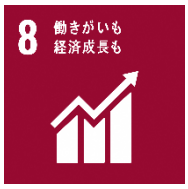
日本の各地で、その地域のもっている魅力を最大限活かした文化が成熟した点が縄文文化のすばらしさであり、定住生活や安定した社会をつくるために、それぞれの地域の資源をどのように活用し、どのような工夫をしたのか。また、なぜその地域を選んだのか。その暮らしぶりや知恵・工夫を明らかにしていくことにこそ、縄文時代を知る意義があります。採集狩猟民としては世界でもまれに見る繁栄と評価される東京湾東岸の大型貝塚群に位置する加曽利貝塚には、現代の私たちが学ぶべき点が多くあります。

上記に基づき、新博物館の整備にあたってＳＤＧｓを踏まえた目標設定を行い、その実現に向けた取組みを積極的に推進していくこととします。

■新博物館整備における目標設定

項目		関連するＳＤＧｓのテーマ	目標の設定
事業活動	調査・研究 収集・保存	9 産業と技術革新の基盤をつくろう 産業と技術革新の基盤をつくろう	縄文文化や貝塚の調査・研究、収集・保存を通して、自然と調和・共存する持続可能な未来を探ります。
	展示・体験	10 人や国の不平等をなくそう 人や国の不平等をなくそう	千葉県では、縄文時代から古代の各時代に地域的な多様性を認め合い、平和と平等を大切にする文化・風土が生まれました。地域の歴史や社会の学習を通じて、子供や若者世代に差別のない社会、包摂的な開発の重要性を伝えていきます。
		13 気候変動に具体的な対策を 気候変動に具体的な対策を	東北や関東の大型貝塚は津波や大雨の影響を受けにくい場所に立地しています。縄文時代は気候変動や火山活動や温暖化による災害が多かったとされており、被害の記憶が語り継がれて、一つの場所に長く住むための知恵に活かされたと考えられます。災害と人の歴史を研究し、学ぶ場所とします。
		14 海の豊かさを守ろう 海の豊かさを守ろう	貝塚の研究によって縄文人の海産資源の利用の実態を解明し、奇跡的に保存された東京湾の干潟・浅瀬の貝類の調査・研究を進めます。展示や学習プログラムを通じて海の豊かさ、大切さを伝えていきます。
		15 陸の豊かさも守ろう 陸の豊かさも守ろう	縄文人が利用した陸産資源の実態を解明し、展示や学習プログラムを通じて森林の豊かさ、大切さを伝えていきます。 植生調査や、文化財 IPM(総合的病害虫管理)、史跡内及び周辺の森林の保護に取り組み、活動内容を発信していきます。
	教育・普及	4 質の高い教育をみんなに 質の高い教育をみんなに	子供から大人まで、さまざまな立場・目的の学習者に適合した展示や学習プログラムを用意して、文化財を学習機会に活用する場を提供します。

※文化財ＩＰＭ：文化財をカビや害虫などの有害生物の被害から守るための環境改善や日常的な管理の取組み

項目		関連するＳＤＧｓのテーマ	目標の設定
事業活動	集客・交流	つくる責任 つかう責任	縄文時代から戦前まで続いた地域資源の有効利用の歴史を学んで、地域の魅力の発見や、持続可能な資源利用について意識をもつ場所に位置づけます。
施設整備		安全な水とトイレ を世界中に	坂月川の生態系の保護・回復を図り、縄文時代の景観復元を目指します。 水利用の効率を高めた施設整備を行うとともに、井戸水等を災害時に提供できるようにします。
		エネルギーをみんなに そしてクリーンに	エネルギー効率の高い建物および施設を整備します。 自然エネルギーの活用により、災害時にも最低限の電源供給等が行えるようにします。
		住み続けられる まちづくりを	「海・さとの持つ美しさと活気ある街の魅力を支える都市づくり」という千葉市の都市づくりの理念を体現する地域に位置づけます。 住宅地のなかで奇跡的に保存されてきた貴重な史跡と周辺の自然景観を今後も保護・保全し、安全で包摂的かつ利用が容易な緑地や公共スペースへの普遍的アクセスを提供します。
管理運営		 働きがいも 経済成長も	文化振興と観光の拠点づくりによって、文化遺産を活用した地域活性化モデルを構築します。市民協働と地域連携により、多くの世代の活躍の場を提供します。
		パートナーシップで 目標を達成しよう	市民協働や地域連携を重視して、様々な世代・立場の人々が活動に参加する「みんなでつくる・育てる博物館」を実現します。

（５）アフターコロナ、with コロナにおける事業活動の展開

新型コロナウイルスの世界的な蔓延を受け、博物館のあり方も大きな変革を迫られました。今後の開館に向けた整備期間中において博物館に求められる対応も変化することが予想されるため、計画の推進に当たっては、社会的な状況や要請に合わせた対策を随時導入していくこととします。

■現時点で想定される取組例

①国際博物館会議ＩＣＯＭや公益財団法人日本博物館協会が示すガイドライン等の遵守

②オンラインコンテンツの拡充

・縄文文化や加曽利貝塚に関する双方向性のある学習プログラム
・学校教育と連携したオンライン学習プログラム
・バーチャルＪＯＭＯＮＩＡ、バーチャルミュージアム（開館前から公開しバーチャル来館体験ができ、開館後は来館による実体験とリンクする）　等

③対応した設備の整備

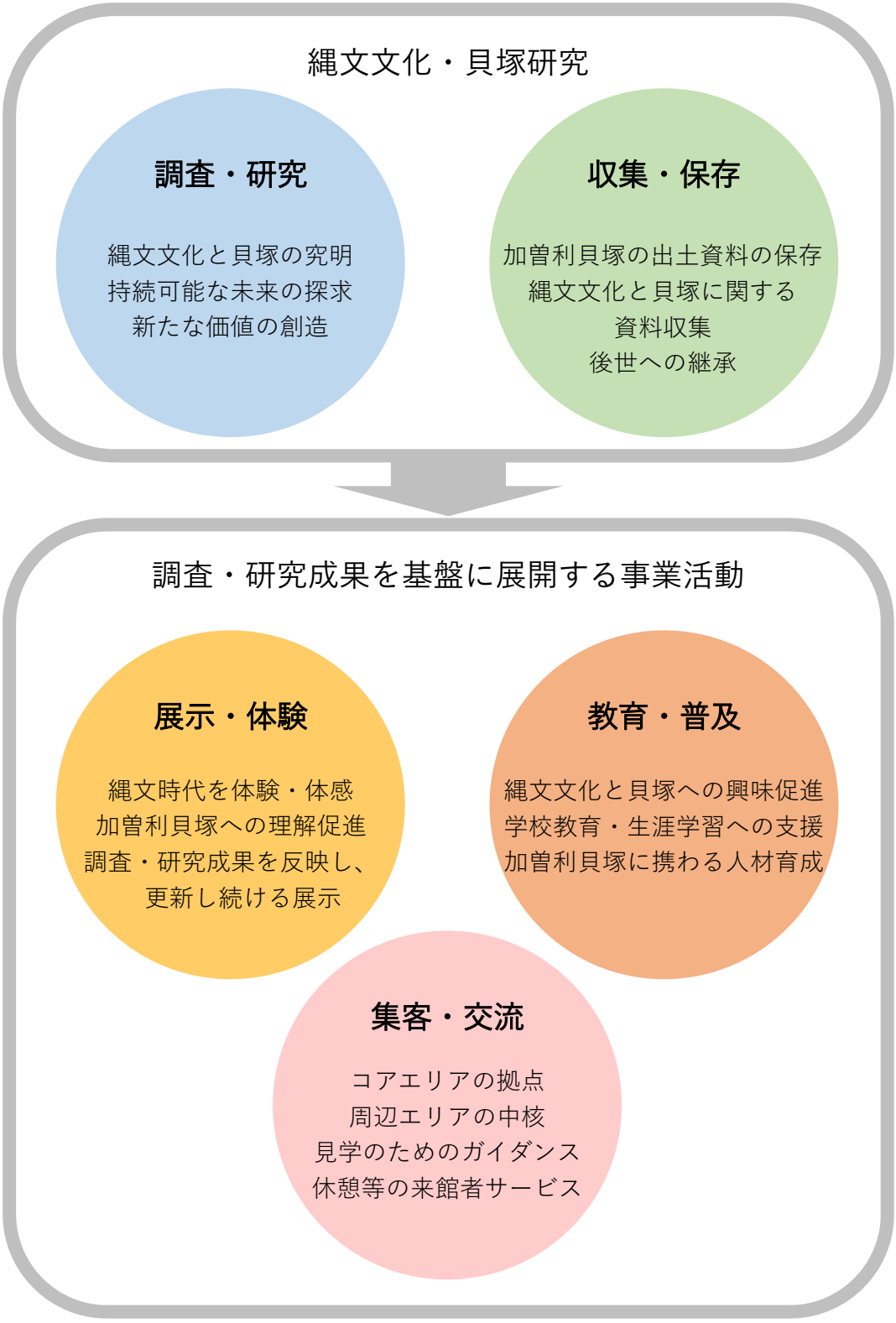
・ウイルス感染を防ぐ空調設備、換気システムの導入

Ⅱ　事業活動計画

1　事業活動の全体像

「新博物館の基本方針」を実現するため、新博物館では次の事業活動を展開します。

調査・研究と収集・保存を基盤とし、展示・体験、教育・普及、さらに集客・交流の事業活動の充実を図ります。



2　事業活動のテーマ

新博物館では、次の事業活動のテーマに沿って、コアエリア全体をフィールドとした活動を展開します。

【事業活動の基本方針】

1．活発な調査・研究を行います

縄文文化と貝塚の性格を究明するための施設と体制を備えるとともに、幅広い連携により、活発な調査・研究を推進します。

2．調査・研究のプロセスや最新の成果を素早く発信します

調査・研究の成果を世界に発信するとともに、来館者がそのプロセスにも触れられる場を設けます。

3．縄文時代の暮らしをまるごと体験する機会を提供します

調査・研究成果に基づいて、縄文の世界を徹底的に再現・演出し、来館者が当時の暮らしをまるごと体験する機会を提供します。

4．自ら学び、考える仕掛けを重視し、生きる力を育みます

体験や展示を通して知識を得るだけでなく、生きることについて来館者が主体的に考えることを重視し、問いかけ・対話などの仕掛けやサポートを充実させます。

5．人々が気軽に何度も集い、交流が生まれる空間を提供します

何度でも通いたくなるワクワクするような空間や体験を提供するとともに、
誰もが気軽に集うことのできる、親しみやすく、居心地の良い空間を演出します。

【新博物館の事業活動のテーマ】

LIVING　JOMON

訪れた人が縄文文化研究の最前線にふれ、縄文時代を丸ごと体験することで、
「縄文時代に来た！」と、その魅力や価値を生き生きと感じられる事業活動を、
コアエリア全体で展開します。

活発な調査研究
×
プロセスが見え、最新成果に
ふれられる**ライブ感**

縄文時代を感じられる環境
×
没入できる**世界観**と
自ら参加できる**体験性**

生活圏からのアクセスの良さ
×
通いたくなる**ワクワク感**と
気軽に集える**居心地の良さ**

学び、考えるテーマや素材
×
自分に関わることとして
主体的に考える思考のしかけ

3　事業活動の展開

（1）調査・研究

ア　基本方針

加曽利貝塚の計画的な調査・研究を推進するとともに、縄文文化や貝塚に関する研究の中核拠点として、貝塚や縄文時代の史跡を有する自治体、研究機関や博物館などと連携し、縄文文化や貝塚の究明に向けた調査・研究、情報の収集を行います。

イ　研究の視点

（ア）加曽利貝塚の調査・研究

・加曽利貝塚における計画的な発掘調査の推進
・発掘調査の成果を活かした、加曽利貝塚の性格や特徴、全体像の究明
・加曽利貝塚の新たな価値を生み出す調査・研究

（イ）貝塚の調査・研究

・貝塚に関する情報収集、調査・研究の推進

（ウ）縄文文化の調査・研究

・縄文社会の究明に向けた調査・研究の推進
・縄文文化を通して、自然と調和・共存する持続可能な未来の探求
・実績ある実験考古学の継承・発展

ウ　研究テーマ

・日本の貝塚、世界の貝塚の分布や特徴
・東京湾の大型貝塚群の成り立ちとそこで育まれた文化
・縄文人の社会と文化
・加曽利貝塚の全体像・独自性
・加曽利貝塚研究のあゆみ　等

エ　推進体制

（ア）学芸職員による調査・研究

・新博物館に所属する学芸職員が、基幹テーマの調査・研究の中心的役割を担う

（イ）研究者との共同研究

・国内外の大学、研究機関、企業などとの連携・交流や研究者の受入れ
・市民による調査・研究活動への参画

オ　調査・研究成果の公開

・展示への反映

・研究の様子を来館者が見られる場や機会の提供

・シンポジウム、研究集会などの開催

・学術雑誌での論文発表

・研究紀要、博物館Ｗｅｂサイトなどへの掲載

（２）収集・保存

ア　基本方針

加曽利貝塚の発掘調査で出土した資料、縄文文化と貝塚に関わる調査・研究や展示・体験に必要な資料を収集し、埋蔵文化財調査センターなどとの分担により適切に保存します。なお、新博物館では展示に活用する資料を中心に保存することとし、その他の資料は埋蔵文化財調査センターやその他施設と連携して適切に保存します。

イ　資料収集

（ア）収集対象

・加曽利貝塚の発掘調査で出土した資料

・縄文遺跡や貝塚からの出土品などの実物資料

・縄文文化と貝塚の研究に必要な二次資料

（イ）収集方法

・加曽利貝塚の発掘調査

・他の研究機関などからの寄贈・寄託・購入

・縄文文化と貝塚に関する情報収集

ウ　資料保存

（ア）分類・保存方法

・材質による分類（土製品、石製品、貝製品、骨角歯牙製品、木製品　等）

（イ）保存環境

・収集した資料について、その形態・性質などに応じた適切な環境の下で保存

・重要文化財の保存に対応した特別収蔵庫を設置

（ウ）データベースの構築

・縄文・貝塚遺跡を中心とした発掘関連情報のデータベース構築

・分散して保存されている収蔵資料の情報を一元的に管理できるデータベース構築

（３）展示・体験

ア　基本方針

様々な興味・関心を持つ人々に対して、遊びや気軽な体験から本格的な学習や研究・体験まで、幅広いアプローチによる展示や体験を展開します。その内容は、調査・研究成果を反映し学術的な裏付けに基づき、常に更新し続けることを目指します。

イ　内容（全体構成）

（ア）常設展示・体験

・縄文時代の社会や文化、貝塚の性格、加曽利貝塚のあゆみや価値などについて、最新の調査・研究成果を踏まえて展示・体験という形態で紹介

・主体的な思考や体験を重視した「探究」「没入」「対話」の三つの手法で展開

・縄文時代の暮らしを実感することにより、縄文文化をとらえ直し、自然と調和・共存する持続可能な未来を考えるきっかけとする

（展開案）

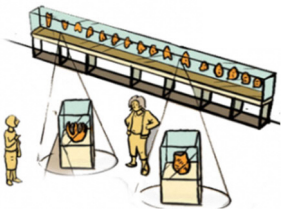
探究型展示・体験（加曽利ＬＡＢ） ～考古学者の目線で縄文文化と加曽利貝塚を深く探究～
実物資料により究明された縄文時代の社会や文化について展示し、縄文文化や加曽利貝塚の特徴、これまでの調査・研究の歩みを伝える。さらに、来館者が調査・研究の一端を体験できるコーナー「アクティブラボ」や学芸職員の作業風景の公開などを通して、調査・研究のライブ感を伝える。
没入型展示・体験（ＪＯＭＯＮＩＡ） ～縄文人になりきり、縄文の世界を楽しむ没入体験～
縄文時代の加曽利ムラを再現した空間で、来館者はムラの一員として縄文の暮らしを体験。気軽に体験できるプログラムから、縄文人に扮した案内役のスタッフとの会話やスタッフのサポートにより体験するプログラムなど、多様な体験メニューを提供。
対話型展示・体験（未来ラウンジ） ～縄文についての対話を通じて、未来へのヒントを得る～
縄文にまつわる現代・未来志向の対話の場。対話を通じて、楽しく自由な発想で現代をとらえ直し、私たちの未来にとって大切なものを考え、語り合う。

JOMONIA は Jomon(縄文)にラテン語の地名を表す接尾辞「-ia」を付けた造語です

（イ）企画展示

・一定期間ごとに多様なテーマや広い視点で展開する、加曽利貝塚や縄文時代を多角的に学び、楽しめる企画展・特別展の開催

例）調査・研究活動の成果、最新の発掘調査の成果などを紹介
市民の調査・研究、土器づくりなどの活動の成果を発表



（ウ）コレクション展示

・寄贈・寄託された日本全国の貝塚関連資料などを展示

（エ）史跡ガイダンス展示

・特別史跡加曽利貝塚を見学する起点として、加曽利貝塚の出土資料を通じ、その全体像を伝える

（オ）導入展示

・来館者への問いかけ、シンボリックな資料の展示などにより、常設・企画・コレクション展示に興味を抱くきっかけを提供

（4）教育・普及

ア　基本方針

展示・体験を通じて生まれた来館者の関心や理解をさらに深め、自発的な学習を支援します。来館者の多様な興味に対応できる教材やプログラムを、最新の研究成果を活かして開発します。また、学校教育や生涯学習の支援を積極的に推進し、地域の歴史や伝統文化に対する誇りや愛着を育みます。

運営にあたっては、新博物館の運営、加曽利貝塚の調査・研究、史跡保全などに参画するボランティアなどの人材育成を行い、多様な人々の交流を促進します。

イ　内容

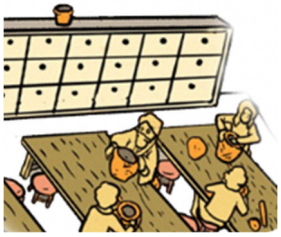
（ア）学校教育・生涯学習の支援

・学校団体の来館の受入れ、案内、見学コースや体験学習などの提供

・カリキュラムに合わせた教材や授業案の開発、教員向け講座の開催

・市内の小・中学校、公民館などの社会教育施設、美術館や文化ホールなどの文化施設にスタッフを派遣し、出張講座を開催

・出土資料（レプリカなど）、ワークシートなどを含む貸出用キットの開発・提供



（イ）コアエリア全体で展開するプログラムの企画・開催

・特別史跡加曽利貝塚を中心としたガイドツアー

・貝塚の発掘体験
・縄文文化を体験するプログラムの開発、運営
・近隣施設を活用し、最新の調査・研究成果を活かした
　シンポジウムや公開講座などの企画・開催

（ウ）人材育成

ａ　既存団体との連携

「加曽利貝塚博物館友の会」、「加曽利貝塚土器づくり同好会」、「加曽利貝塚ガイドの会」、「加曽利貝塚自然観察会」、「坂月川愛好会」、「縄文の森と水辺を守る会」などの協力の下、様々な事業を展開するとともに、定期的な講習などを通じて人材を育成

ｂ　新規スタッフの募集・育成

展示室における縄文体験のサポート、史跡や縄文の森を含めた見守り、子どもの展示見学・体験参加のサポート、文化財ＩＰＭにおける日常管理などを担う人材を募集・育成

（５）集客・交流

ア　基本方針

史跡見学の起点となるガイダンス機能として、加曽利貝塚に関する基礎的な情報に加え、コアエリア全体の利用案内や体験プログラムなどの情報を提供し、来館者それぞれの興味や関心に応じた楽しみ方を選択できるようにするとともに、コアエリア全体の見学や体験をサポートする休憩や飲食などの利用者サービスの充実を図ります。さらに、コアエリアにおいてイベントを開催したり、近隣の文化施設と連携することで、新たな来館者の獲得やリピーターづくりにつなげます。

イ　内容

（ア）新博物館の案内

・新博物館の利用方法、見どころ、開催しているイベント、体験プログラムなどの案内

（イ）コアエリアの案内

・加曽利貝塚の価値や特徴など、概要の紹介
・加曽利貝塚の見どころ、所要時間別見学ルート、
　見学する上での注意事項などの案内
・史跡や縄文の森で開催しているイベント、体験
　プログラムなどの案内

（ウ）サテライトの案内

・周辺エリアに点在する史跡荒屋敷貝塚や史跡花輪貝塚などの縄文時代の遺跡、縄文

の森、坂月川ビオトープなどの加曽利貝塚と関連の深い場所の紹介
・サテライトにおいて開催されるイベント、体験プログラムなどの案内

（エ）飲食サービス
・史跡での見学や新博物館での展示見学・体験参加による疲れを癒し、展示テーマに関連した特別なメニューで、休憩時間においても縄文体験を楽しめる飲食可能なコミュニティスペースなどの運営

（オ）ミュージアムショップ
・加曽利貝塚に訪れた記憶を持ち帰れるオリジナルグッズ
などを販売するミュージアムショップの運営

（カ）キッズコーナー
・より幅広い年齢層をターゲットとするため、未就学児でも安心して保護者とともに安全に過ごせるスペースを設置

（キ）展望スペース
・坂月川をはさんで特別史跡加曽利貝塚をはじめ市内を一望できる、展望スペースやテラスなどを設置

（ク）集客・交流イベント
・新博物館、史跡及び縄文の森において、来館者層を広げるための様々なイベントの企画・実施
例　縄文まつり、ナイトミュージアム、ナイトウォーク、縄文キャンプ、
物々交換マーケット、トークイベント、貝塚コンサート、野外シアターなど

＜これまでの実績例＞

縄文春まつり（石器による魚の解体ショー）

縄文春まつり（土器抽選会）

ナイトミュージアム（貝塚コンサート）

ナイトミュージアム（星空観察会）

（ケ）近隣の文化施設との連携

・来館者を周遊させるために、近隣の遺跡や博物館と連携し、イベントや展示・体験、入場料の割引などを実施

例　貝塚スタンプラリー、共通テーマの企画展の同時開催、
入場料の相互割引やセット券の販売など

4　史跡及び関連施設との機能の分担・集約

（1）コアエリア全体の情報拠点

コアエリア全体のインフォメーションセンターとして位置づけ、史跡をはじめコアエリア全体の概要やプログラムに関する情報を一元的に集約し、利用者に提供します。

また、Ｗｅｂサイト、ＳＮＳなどによる発信を行います。

・利用案内：館内及びコアエリアのマップ、見学時間、公開状況などを提供
・学術情報：加曽利貝塚に関する調査・研究成果を提供
・イベント・プログラム情報：コアエリア内で開催されるイベント、各種プログラムなどの開催情報やそれらの参加申込みの受付状況などを一元的に管理
・無料公衆無線 LAN（Wi-Fi）環境の整備

（2）史跡及び関連施設との連携

・千葉市立郷土博物館との役割分担・集約
・千葉市埋蔵文化財調査センターとの役割分担・集約
・縄文文化をテーマにした博物館との連携
・貝塚を有する自治体との連携
・千葉県立中央博物館など近隣の関連施設との連携

（3）サテライト周遊ネットワークの全体像

・サテライトの周遊を促すため、縄文文化や貝塚に興味を持つ利用者に対する周辺エリアの見どころや利用案内、来訪に必要な交通手段などの情報提供
・コアエリアへの来訪を促進するため、市民や市内を訪れた者に対する加曽利貝塚に関する情報発信
・国内外からの集客拡大のため、観光協会や民間企業などと連携した、加曽利貝塚を中心にした観光プロモーション、ツアー商品の開発、情報発信